

避難ルール 住民検証

岩手・大槌の安渡町内会が防災訓練

東日本大震災で被災した岩手県大槌町の安渡町内会は2日、昨年4月に住民自ら策定した津波防災計画の避難行動ルールを検証する防災訓練を町と合同で実施した。

防災集団移転促進事業など基盤整備が遅れる中、住宅再建を待たずに意識を高めようと、地

訓練は午前10時、大地震と津



区外の仮設住宅で暮らす住民にも呼び掛け、約200人が参加した。

波警報が発令された想定で実施した。更地になった住宅街から旧安渡小など地区内3カ所の高台へ避難した。

参加者は「地震だ、津波だ、高台避難」と声を掛け合った。高齢者ら要援護者については、家族が玄関まで高齢者を出す「自助」、近所の人がりやかり

自助と共助 課題洗い出し

に乗せて搬送する「共助」など自主ルールに基づく避難行動を確認した。避難をためらう人を説得しながら高台を目指す訓練もした。



リヤカーに要援護者を乗せて坂道を上る住民ら

安渡地区では震災前、地元消防団が寝たきりの高齢者を把握し、震災当日は救助に向かった団員8人が犠牲になった。自主ルールでは要援護者支援を地震後15分以内と定めたが、消防団員からは「どこまで活動すべきか、いまだに葛藤がある」と戸惑いの声もあった。

安渡町内会の佐々木慶一副会長は「ルールは定めたが課題もある。訓練を繰り返す常に見直していく」と話した。

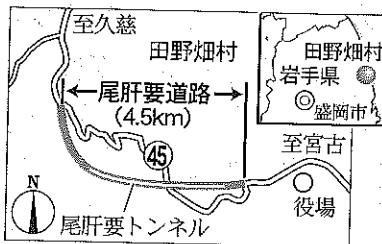
復興道路・岩手県内2例目

「尾肝要道路」開通

国が東日本大震災の復旧、開通した。

復興道路に位置付ける三陸沿岸道(仙台八戸、313km)のうち、復興道路として開通したのは、岩手県田代町の自動車専用道路「尾肝要(おかんよう)道路」(4.5km)が2

57キロが通行可能になる。尾肝要道路は国道45号



地元の郷土芸能で完成を祝った尾肝要道路の開通式

に接続し、尾肝要トンネル(延長736m)を整備した。これまでカーブが連続する国道45号が主要道路だったた

3県3大学

復興支

山形大、宮城教育大、福島大が東日本大震災後に取り組んできた支援活動を報告する災害復興市民フォーラムが2日、山形市内であり、各大学の計3団体が復興の「これまで」と「これから」を語り合った。

山形大の学生有志の団体「START Tohoku」は、石巻市の被災地を語り合った。

り、14人の雇用が生まれます」

今後の課題は。

「町が担う責任を、行政に転嫁する風潮がありました。最近、あるメンバーが『自分たち

ちのせいだったんだね』と話す

盛って 井で 誘客

大間町が全国ブランドだが、実は漁獲量は日本海側の深浦町が県内1位を誇る。

圏や県外からの客が中心。マグロの30代を聞き、草履の音を聞き

